今月の読み物

組合創立120周年記念連載④
木と暮しのふれあい展の歴史

副理事長　森林慎介

昭和52年（1977年）７月、日本木材青壮年団体連合会（木青連）が10月８日を「木の日」にしようと提案してきた。昭和55年（1980年）10月、木青連が木材PRを行う象徴的な日として、10月８日を「木の日」とすることを正式に決定した（木という漢字を分解すると十と八になるから）。

昭和56年（1981年）10月８日午前９時から東京都木材団体連合会（都木連）が主催し、全国木材組合連合会（全木連）が後援する第一回木の日の祭典が、日比谷公園大音楽堂で華々しく開催された。当日は朝から生憎の雨だったものの、約1,000名の方が式典に参加された。来賓として出席された林野庁長官、東京都労経局長、全木連会長、木青連直前会長が祝辞を述べられた。式典終了後、パレードが行われた。「10月８日は木の日です」「長生きしよう木の家で」と記した横断幕を付けたトラック43台に木曾桧の丸太や内外産原木・製品などを積み込み、有明12号地から深川、水天宮、須田町、九段、市谷、赤坂見附、数寄屋橋、呉服橋、永代橋、新木場のコースを回った。数寄屋橋公園では3,000枚のまな板を販売し、PR用パンフレットを配り、木の日の祭典を盛り上げた。

翌年の昭和57年（1982年）10月８日は会場を芝公園23号地に移して開催された。この日も天候は雨であった。木製品のオークションや木工教室や昔ながらの木挽きの実演などを行い、参加者を楽しませた。今回も木曽桧や秋田杉をトラックに積み込み、パレードを行った。毎年の恒例行事となり、昭和の時代は都立日比谷公園を主な開催場所として、平成２年（1990年）は潮見のウッディランド東京、平成３年（1991年）からは新宿の都庁都民広場、そして平成７年（1995年）からは都立木場公園で開催されている。

開催名称も最初は「木の日の祭典」、昭和58年（1983年）から「木の日」、昭和62年（1987年）は「木の日の集い」、昭和63年（1988年）からは「木の日のつどい」、そして平成11年（1999年）からは現在も使われている「木と暮しのふれあい展」となった。

開催のメインテーマは、「木材需要の促進」、「木とのふれあいを大切に」、「健やかに幸せいっぱい木の住まい」、「緑に愛を木に感謝を」、「木を使うことで森が守られていることも知ってほしい」、「木を使う心が森を育てます」、「人にやさしい木を使おう」、「森を育てたい。だから木を使う」、「森を育てたい。だから木を使おう」となり、自然や環境を重視した言葉になっている。出展団体数も最初の頃は10前後だったが、平成11年（1999年）からは20前後になっている。

S56.10.8 主催 都木連　トラックでのパレード

S56.10.8 会場の様子（日比谷公園大音楽堂）
東京木場製材協同組合 創立50周年記念誌 50年の思い出アルバム

当組合も毎年出展し、木工教室、木の表札作り、箸作り、射的、木の掘り出し市、樹種当てクイズ等趣向を凝らし、参加者を楽しませている。

（本文は江戸東京木材史より抜粋）